

4. 緩和ケア・がん患者サロン・デイホスピス等の活動

A. 広島県緩和ケア支援センターのデイホスピス

本家好文^{*1} 亀井典子^{*1} 阿部まゆみ^{*2}

(^{*1} 広島県緩和ケア支援センター ^{*2} 名古屋大学大学院 医学系研究科 看護学専攻)

広島県緩和ケア支援センターの機能

広島県では県内の緩和ケアを推進する拠点として、2004年9月から広島県緩和ケア支援センターの運用を始めた。当センターでは情報提供、総合相談、研修、地域連携の4つを柱として、地域の連携体制を構築して在宅緩和ケアを推進することや、緩和ケア病棟や緩和ケアチームを中心とした施設緩和ケアを充実させること、緩和ケアを担う人材の育成を重点的に取り組んでいる。

具体的な事業内容としては、

①緩和ケアに関する情報収集、情報発信事業：緩和ケア支援センター内に情報収集室（図書室）を整備して、専門書や一般書などが閲覧できるようにした。患者家族や医療者がインターネットによる情報収集ができるスペースも設置している。

②患者家族および医療機関などを対象とした相談事業：がん医療全般に関すること、緩和ケアに関すること、症状緩和に関すること、療養場所の選択に関する相談に対応している。

③医療・福祉・介護関係者などを対象とした研修事業：緩和ケアに関する知識・技術を習得するために、医師・看護師・薬剤師・ケアマネジャー・介護職などに対する研修を実施している。基礎的な知識を学ぶコースから専門的な知識を習得するコースまで、地域の要望に応えながら研修プログラムを実施している。

症状マネジメント・チームアプローチなどの知識を学ぶ講義に加えて、コミュニケーションスキルなどの実践的な技術習得のためのプログラムも実施している。

④地域連携を推進するための事業：緩和ケアを推進している二次保健医療圏域にアドバイザーを

派遣して講演会を開催したり、事例検討会などを通じて具体的な課題解決法を学び、地域緩和ケアの推進を行っている。

また在宅緩和ケアを推進する事業の一環として、在宅療養中の患者をおもな対象として「デイホスピス」を実施している。

デイホスピスの実践

1. デイホスピスが求められる理由

がんの積極的治療中や治療終了後に、自宅で療養している患者やその家族のQOL向上を図るための支援プログラムとして、「デイホスピス」は有用と考えている。一般病院の在院日数が短縮化傾向にあり、早期の退院を迫られても、地域によっては訪問診療や訪問看護師などの資源不足もあり、十分な緩和ケアサービスが届けられていないこともある。地域によっては緩和ケア病棟設置にも物理的な限界がある。

自宅で療養しながら抗がん治療を受けたり、治療後に療養している患者の多くは、身体症状が悪化した場合の対応や、介護力が乏しい状況で日常生活を継続することに不安を感じている。患者だけでなく家族の心身も負担が大きくなり疲弊する場合がある。こうした状況を改善する手段のひとつとして、通院しながらケアを受ける「デイホスピス」機能が有用である。

2. デイホスピスの概要とその役割（表1）

デイホスピスの役割は、通院で抗がん治療を受けたり、抗がん治療が困難になって在宅療養している患者が、デイホスピスを通して在宅療養を継続するために必要な支援を受けられるようにする

表1 デイホスピスの概要

<p>《趣旨》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・がんを抱えながら在宅療養している患者が、同じ病をもつ人との交流や癒しの時間を通じて自分らしさを取り戻す場所である。 ・がんになったことをマイナスばかりに考えるのではなく、心身のリハビリテーションを通して気持ちの充実を図って生活の質を高めることを目的にしている。 <p>《対象》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自宅・緩和ケア病棟・一般病棟で療養しているがん患者およびその家族 ・医療機関に入院中で在宅療養へ移行する患者 <p>対応内容:初回は看護面談を行い、ニーズに応じてプログラムを実施する(創作活動、音楽療法、アロマトリートメントなど)。</p> <p>実施日:毎週火曜日・金曜日 10時～15時</p> <p>利用方法:利用者、家族、医療関係者から電話で予約する。</p> <p>利用料金:飲食は各自実費で準備する。</p> <p>紹介元:県立広島病院の一般病棟、緩和ケア病棟、緩和ケア外来。その他の医療機関からも可。</p>
--

表2 参加者数の推移

年度	実参加者数	延べ参加者数	内容
2004年度	—	—	ハンドブック作成
2005年度	30	326	
2006年度	33	518	
2007年度	3	106	
2008年度	4	53	
2009年度	17	90	一般病棟へ拡大
2010年度	23	119	
2011年度	11	66	
2012年度	7	60	
2013年度	8	60	
2014年度	16	93	
2015年度	4	33	

2015年度は10月末現在

ことである。専門職による「看護セラピー」「クリエイティブセラピー」などを受け、「心身を癒す空間」を提供し、総合的なサービスを提供して、QOLを高めて患者や家族の生き方を支える。また、療養場所を病院から在宅に移行しても、継続した質の良い緩和ケアを提供するためにも重要な機能と考えられる。

デイホスピスを通じて同じ病を抱えた人が触れ合いの時間を持ち、作業療法などを通して孤立しないように援助すること。病状が説明されていない不安に対して、分かりやすく説明すること。患者が死について話したい時に、それを分かち合う時間をもつこと。家族がサポートを必要とした時に、支援が受けられることを保証する取り組みである。

3. デイホスピスの目標

緩和ケア支援センター開設と同時に、新たな緩和ケア提供の形としてデイホスピスをモデル事業として開始した。デイホスピスを利用して家族がリフレッシュできるようにしながら、在宅療養が続けられることを目標としている。

デイホスピスは在宅療養中の患者だけでなく、緩和ケア病棟入院中の患者も気分転換や人との交流、心身のリハビリを目的として利用している。

デイホスピスでは病をもちながら過ごしている人との関わりを通して、孤立しないで安心を得ることができ、気持ちの安らぎにもつながる。

デイホスピスに参加することにより、病と向き合うだけの人生から、日々生きている実感を味わうことによって、自らの人生を肯定するプロセスを支えることになる。またライブレビューを通して充実感を味わい、次の世代へのメッセージを託したり、家族の絆を育む時間にもできる。

4. デイホスピスの実際 (表1)

デイホスピスには、週2回、がんとともに歩む人々が集う空間がある。デイホスピスは、年齢、性別、疾患や住んでいる地域も異なる人たちの憩いの場となる。

プログラムは語りの場を通して、がんと診断されてからの闘病生活に触れながら、お互いを知ることから始まる。利用者はおもにデイホスピス利用者との交流などを通して、疾患についての知識を深めていく。

また参加者とともにやる絵手紙や、音楽療法で懐かしい曲を聞いたり歌いながら時間を過ごす。ボランティアとともに季節の花をキャンバスに描く人、好きな詩や朗読などを楽しむ人など、過ごし方はさまざまである。徐々に精神的な安定や日常

表3 デイホスピス実施状況

2004年度～2006年度	： デイホスピスモデル事業として実施
2007年度～	： 県立広島病院がんサロンと協力して実施
2008年度～	： 各地域がん診療連携拠点病院の取り組みを推進
2009年度～	： 県立広島病院内の一般病棟や緩和ケア病棟、近隣の医療機関からの参加が増加
2012年度～	： 県立広島病院一般病棟から院内緩和ケアチームを通じての紹介が増加
2014年度～	： 一般病棟からの紹介が徐々に増加

の楽しみなどが表現されるようになり、孤独な状況からの解放と病気との向き合い方、日常生活の工夫などに変化が見られるようになる。

デイホスピスの実施状況

2004（平成16）年9月からの3年間は、広島県緩和ケア支援センターのモデル事業としてデイホスピスを実施してきた。その3年間には、院内や地域に対してデイホスピスに関する広報や啓発活動を活発に行った。その後は緩和ケア支援室のスタッフとボランティアを中心に実践してきた。年度ごとの利用者数推移を（表2）に示している。

また2007年からは、がん診療連携拠点病院である県立広島病院において、がん患者や家族の交流の場として「がんサロン」が設置され、毎月1回の学習会・交流会が開かれるようになり、デイホスピスと連携しながら開催している（表3）。